

アウグスティヌスにおける「徳」の問題 — 『禁欲』を中心に —

菊 地 伸 二

はじめに

アウグスティヌスにおいて「倫理」や「道徳」の問題について検討するとき、かれが、「徳」についてどのように考えていたかを知ることは重要なことである。ところで、「徳」については、古代ギリシア哲学以来、いわゆる四元徳（ないしは枢要徳）と呼ばれる「節制 *temperantia*」「剛毅 *fortitudo*」「正義 *justitia*」「賢慮 *prudentia*」に関しても、アウグスティヌスは、その初期の作品である『カトリック教会の道徳』において、いち早く取り上げ、これを愛との関係で説明しようとしており、たとえば、次のように言われている。

「神は人間の最高善であり、最高善を求めることはよく生きることであり、よく生きることは、心をつくし、靈魂をつくし、精神をつくし、神を愛することである。そして、神に対する愛が無傷に腐敗することなく守られることが「節制」であり、あらゆる災いにもひるまなくなるのが「剛毅」であり、他の何ものにも仕えなくなるのが「正義」であり、誤謬と欺瞞が忍び込まないように事物を識別するに際して警戒するのが「賢慮」である¹。」

あるいはより直接的に次のようにも言われている。

「「節制」とは、神のために自らを潔白なものとして保つ愛であり、「剛毅」とは、神のためにすべてのことを喜んで耐え忍ぶ愛であり、「正義」とは、神のみに奉仕し、そのために従属している他のものに正しく命令する愛であり、「賢慮」とは、神にいたるために助けになるものと妨げになりうるものとをよく見分ける愛である²。」

これは後の中世キリスト教の世界において、対神徳と言われる「信仰 *fides*」「希望 *spes*」「愛 *caritas*」との関係で四元徳（ないしは枢要徳）が問題にされていくことを考えあわせると非常に興味深いことである。ただ、アウグスティヌスにおいては、四元徳（ないしは枢要徳）についての解明は、その後、必ずしも持続されていたわけではないように思われる。とはいえ、そのことの故に、アウグスティヌスは、初期においては、「倫理」や「道徳」の問題について真正面から考察していたが、中期・後期になるにしたがって、そのような問題には関心を抱かなくなったのかと言われるならば、それはまったく違っていると

言わざるを得ないであろう。

本論では、アウグスティヌスの後期の作品の一つである『禁欲』を取り上げ、その作品において、かれが、キリスト者における「倫理」や「徳」についてどのように考えていたかを明らかにしたいと思う。

1. 『禁欲』という作品

さて、ここで取り上げる『禁欲』という作品であるが、その内容について紹介するに先立って二つのことを確認しておきたい。

ひとつは訳語についてである。原題は、*De continentia* である。「自制」「節制」「貞潔」などとも訳される言葉であり、「禁欲」という訳語が果たして適当かどうかということに関しては疑問もなくはないが、教文館の日本語訳でそのように訳されたという経緯があるので、ここでも一応そのように訳しておくことにする³。

もうひとつは執筆年代についてである。従来は、本作品は、アウグスティヌスが司教に就任した頃である395年ごろに書かれたとする説が大勢を占めていた。その大きな理由は、この作品で扱われているマニ教徒に対する反駁が、おおむねその時期に特徴的なことだったからである。しかしながら、最近では、マニ教徒を反駁するのは、たしかに、390年代に集中してはいるものの、必ずしも、その年代に限られたものではないことと、むしろ、この作品には、マニ教徒に対してよりも、ペラギウス主義に対して反駁する意図が含まれていることが指摘され、しかも、ある研究者によれば、それは年代的に418年ごろであるとする見解が有力になってきた。ここでは、その年代を確定する作業は断念せざるを得ないが、最近の研究の動向を重視しながら、この作品の執筆年代を大きく後ろにずらすことにしたいと考える⁴。

2. 『禁欲』の構成と概要

さて、それでは、『禁欲』とは具体的にどのような作品であろうか。羅仏対訳版には、作品全体がいくつかに分けられ、かつ表題が付せられているので、ここでもそれに従いながら、全体の構成を見ることにしたい⁵。

それによれば、全体は、序文と二つの部と結論から構成されており、具体的には、第1部では、「禁欲とは何か」ということが、第2部では「禁欲の戦い」ということが論じられている。第1部の「禁欲とは何か」は、さらに三つの章に分かれており、第1章では「禁

欲は心に存している」ということが、第 2 章では「肉は禁欲の敵である」ということが、第 3 章では「高慢は用心しなければならない」ということが論じられている。第 2 部の「禁欲の戦い」は、さらに三つの章に分かれており、第 1 章では「人間本性は救われなければならない」ということが、第 2 章では「人間本性を蔑む考えを論駁する」ということが、第 3 章では「禁欲は実り豊かで、栄光に満ちた労苦である」ということが論じられている。

それでは、『禁欲』の概要について、順を追って見ていくことにしたい。

まず、序文 (1,1) では、「禁欲と呼ばれている魂の徳について、それが神の賜物である」ということが述べられている。その出発点とともに、併せて述べられていることは、結婚生活も独身生活もともに神の賜物であるということである。

次に、第 1 部「禁欲とは何か」の第 1 章「禁欲は心に存している」では、禁欲というものを「肉の下等な諸部分の欲望にだけ必要なもの」としてのみ理解しないように言われ、人間の内面には心の口とも言うべきものがあり、心で語るということ、すなわち、心で同意することの重要性が示される。こうして、「身体の性的諸部分を抑制することによる貞潔が、普通、とくに禁欲と呼ばれていますが、それは、これまでわたしたちが話してきた、より高度の禁欲が心の中で守られるならば、いかなる違反によっても侵害されることはありません」(2,5) と言われることになる。ここで言う禁欲が守られるとは、禁欲によって肉の欲望に対する同意が得られないということである。

続いて、第 2 章「肉は禁欲の敵である」では、「禁欲は、欲望を制御し抑制するとき、同時に、わたしたちが到達しようとしている不死という善を熱望し、またわたしたちがこの世の死すべき境遇の中で格闘している悪を退ける」(3,6) と言われている。しかしながら、このような悪との格闘は、「徳の闘士や悪徳の征服者でなければ自分自身の中で経験することができない」(3,7) とも言われている。さらに、「わたしたちの内には罪という欲望がありますが、それが支配することを許してはなりません。その欲望は存在しますが、しかし、わたしたちが屈服して支配されることのないように、それに服従してはなりません。それゆえ、欲望にわたしたちの五体を横領させてはならず、五体を禁欲のものとなるようにしなくてはなりません。……そうなれば、罪はわたしたちを支配しないでしょうから。じっさい、わたしたちは律法の下にはいるものではありません。律法は、善を命じるけれども、善を与えてはくれません。しかし、わたしたちは恵みの下にはいるのです。恵みは、律法の命じるものをわたしたちが愛するようにさせることによって、自由な者であるわたしたちに命じることができるのです」(3,8) と言われ、恵みの下に生きなくてはならないことが

述べられる。恵みの下にいる人びとは、肉の業に対して戦うことを望むのであるが、禁欲は、そのなかであって「ある意味で肉の欲望そのものを十字架につけるものである」(3,9)とも述べられている。

続いて、第3章「高慢は用心しなければならない」では、「自分自身に信頼をする人もまた肉に従って生きる人である」(4,10)と述べられている。肉に従うのではなく、人間理性に従うという意味で、自分自身に従うことこそが重要であるという見解もありうるが、これに対して、アウグスティヌスは、神により頼まない生き方は高慢であると述べ、「神の霊が禁欲を与え、それによってわたしたちは欲望を抑制し、支配し、克服する」(5,12)と明確に述べている。自らの罪を告白する生き方ではなく、自らの罪を弁護する生き方を支える考え方もあることを紹介し、その中にはマニ教徒の考えも例に挙げられている。自らの罪を弁護するなかに働いているものこそは、人間の有する高慢に他ならず、それを抑制するものがまさしく禁欲なのである。

次に、第2部「禁欲の戦い」の第1章「人間本性は救われなければならない」では、「禁欲は、わたしたちの心が罪の言い訳をしようとして悪い言葉に傾かないように、神がくださった賜物であり、わたしたちに必要なものである」(7,17)とされている。「悪を避けるためには、わたしたちはあまねく禁欲を必要とする」(7,17)ともされている。また、聖書の「悪を避け、善を行え」(詩 34,15)と「腰に帯を締め、ともし火をともしないさい」(ルカ 12,35)から、各々、前者のためには禁欲が、後者のためには正義が必要であることが述べられている。これは、その結果としての、神の完全で永遠の平和のうちにいることにつながることなのである。また、たしかに、聖書に、「霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、けっして肉の欲望を満足させるようなことはありません。肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立しあっているので、あなたがたは、自分がしたいと思うことができないのです」(ガラ 5,16-17)と記されているからといって、マニ教徒のように、あたかも、善の本性と悪の本性があるかのよう理解することは間違っており、両者ともに、神から由来する善であることが述べられる。ただ、完全な救いが来るまでの間は、人間のこの善き本性において、つまり、善なるかたによって善く造られた秩序づけられている人間の本性において、いまは戦いがあるのである(7,18)。

肉は魂を通してでなければ何も望まないが、しかし、肉の望みによって魂が霊に反するとき、肉の望むところは霊に反するのであり、この全体がわたしたちなのである(8,19)。

こういうわけで、肉はわたしたちの敵ではなく、罪悪と考えるべきなのである。わたしたちには罪の欲望があるけれども、それに服従しない、それに同意しないことによって、間違った生き方を免れることになるのである。もちろん、この世においては、それは継続するのであるが、この世の後には、真の至福なる不滅が訪れるのである。

続いて、第 2 章「人間本性を蔑む考えを論駁する」では、改めて、マニ教徒の二つの本性の捉え方を批判する。アウグスティヌスは、使徒パウロの書簡で言われている「キリストと教会」「夫と妻」「霊と肉」という三つの組み合わせを用い、前者が後者の世話をし、後者が前者に仕えるという関係にあることから、かれらに対する批判とするのである。さらに、マニ教徒は「禁欲」の意味も誤解していることを指摘するとともに、誤った「禁欲」や「忍耐」の使われ方がいくつか紹介され、信仰を持たない「禁欲」は、「禁欲」と呼んではならない (12,26) と言われている。

続いて、第 3 章「禁欲は実り豊かで、栄光に満ちた労苦である」では、真の「禁欲」について、「上の方から来るあの真の禁欲は、ほかの悪のためにある種の悪を押さえ込みたいとは思うのではなく、善によってすべての悪を癒したいと思うのである」(13,28) と言われ、その活動については、「第一に、知恵の喜びに対立する欲望のあらゆる喜びを完全に抑えて癒すことに集中することが禁欲の務めである」(13,28) と述べられている。罪悪と見なされる欲望は、たんに身体にあるだけでなく、魂にもあるのであり、それらはすべて肉の業と呼ばれている。人間がこの業を行う限り、このことを行う人間は自分自身に従って生きるものであり、人間のものなのであるが、しかしながら、人間の中には、むしろ、神の業と呼ばれるべき業があると言われる。神の霊に結びついている人間の霊の望むところは、肉に反する、すなわち、自分自身に反するのであり、しかも、それは自分自身のためなのである。しかしながら、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」という聖書の言葉があるように、肉の業は、間断のない禁欲によって復活しないように阻止されることによって、捨て去られるのである。

最後に、結論において、わたしたちに禁欲を与えてくださる方を賛美することが奨励され、わたしたちが自分たちの罪悪を征服して消滅させるためにそれらの罪悪と戦っているこの世においてであれ、あるいは、わたしたちはすべての災難から免れるので、すべての敵がいなくなる、来たるべき終わりのときにおいてであれ、わたしたちに起こることは救いのためのものであり、したがって、「誇る者は主を誇れ」(I コリ 1,31) という聖書の言葉は真実なのである。

3. 「禁欲」をめぐる

(1) 「禁欲」とは何か

前章で、『禁欲』の構成と概要について述べたが、改めて、この構成について見るならば、次のようになっている。

序文

第1部 禁欲とは何か

第1章 禁欲は心に存している

第2章 肉は禁欲の敵である

第3章 高慢は用心しなければならない

第2部 禁欲の戦い

第1章 人間本性は救われなければならない

第2章 人間本性を蔑む考えを論駁する

第3章 禁欲は実り豊かで、栄光に満ちた労苦である

結論

*

次に、『禁欲』において、「禁欲」について叙述されているところを取り上げると次の通りである。

まず序文において、「禁欲」と呼ばれている魂の徳について、それが神の賜物であると言われていることは注目に値する。つまりここで、「禁欲」とは魂の徳であるとともに、神の賜物であると言われているのである。

第1部第1章では、「禁欲」は、「肉の下等な諸部分の欲望にだけ必要なもの」ではなく、より高度の「禁欲」が心の中で守られるならば、いかなる違反によっても侵害されることはないと言われ、「禁欲」が守られるとは、「禁欲」によって肉の欲望に対する同意が得られないことが意味されるのである。第1部第2章では、「禁欲」は、欲望を制御し抑制するとき、同時に、わたしたちが到達しようとしている不死という善を熱望し、またわたしたちがこの世の死すべき境遇の中で格闘している悪を退けるのであるが、恵みの下にいる人びとは、肉の業に対して戦うことを望むのであり、「禁欲」とは、ある意味で肉の欲望そのものを十字架につけるものであると述べられる。第1部第3章では、自分自身に信頼をする人もまた肉に従って生きる人であると言われ、神により頼まない生き方は高慢なのであって、神の霊が「禁欲」を与え、それによってわたしたちは欲望を抑制し、支配

し、克服すると明確に述べている。自らの罪を弁護するなかに働いているものこそは、人間の有する高慢に他ならず、それを抑制するものがまさしく「禁欲」なのである。

第 2 部第 1 章では、「禁欲」は、わたしたちの心が罪の言い訳をしようとして悪い言葉に傾かないように、神がくださった賜物であり、わたしたちに必要なものであると言われている。また、悪を避けるためには、わたしたちはあまねく「禁欲」を必要とするとも言われている。また、聖書の「悪を避け、善を行え」から、悪を避けるためには「禁欲」が、善を行うためには「正義」が必要であることが述べられている。これは、その結果としての、神の完全で永遠の平和のうちにいることにつながることなのである。ただ、完全な救いが来るまでの間は、人間のこの善き本性において、つまり、善なるかたによって善く造られた秩序づけられている人間の本性において、いまは戦いがあるのである。第 2 部第 2 章では、マニ教徒の二つの本性の捉え方を批判するとともに、かれらは「禁欲」の意味も誤解していることを指摘しながら、およそ信仰を持たない「禁欲」は、「禁欲」と呼んではならないと述べられている。第 2 部第 3 章では、真の「禁欲」について、上の方から来るあの真の「禁欲」は、ほかの悪のためにある種の悪を押さえ込みたいと思うのではなく、善によってすべての悪を癒したいと思うのであると言われ、「禁欲」の務めについては、第一に、知恵の喜びに対立する欲望のあらゆる喜びを完全に抑えて癒すことに集中することであると述べられている。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」という聖書の言葉があるように、肉の業は、間断のない「禁欲」によって復活しないように阻止されることによって、捨て去られるのである。

最後に、結論において、わたしたちに「禁欲」を与えてくださる方を賛美することが奨励される。わたしたちが自分たちの罪悪を征服して消滅させるためにそれらの罪悪と戦っているこの世においてであれ、あるいは、すべての敵がいなくなる、来たるべき終わりのときにおいてであれ、わたしたちに起こることは救いのためのものであり、したがって、「誇る者は主を誇れ」という聖書の言葉どおりであることが述べられる。

全体を通して、「禁欲」の有する魂の徳としての性格とともに、神からの賜物であるという性格の両方について記されており、そのプロセスにおいて、マニ教徒の見解やペラギウス主義的な見解が批判されているとすることができるであろう。

(2) 「禁欲」と四元徳との関係

『禁欲』の序文において、「禁欲」は魂の徳であると明確に述べられている。それでは、

この徳は、人間の持ちうる他の徳とどのような関係にあるのであろうか。たとえば、アウグスティヌスの初期の作品である『カトリック教会の道徳』においては、いわゆる四元徳（ないしは枢要徳）について記されているが、これらの徳とはどのような関係にあるのであろうか。結論的に言うならば、これらの徳とどのような関係にあるかは明確ではない。四元徳（ないしは枢要徳）の一つである「節制」と語義的には近い可能性はあるが、それを引き継いだと断定することはできない。

しかも、「禁欲」とは、魂の徳であると共に、神の賜物である、という表現からすると、四元徳（ないしは枢要徳）という枠組で考えるだけでは不十分で、むしろ、信仰・希望・愛と言われる対神徳とも関連づけて考える必要があるかもしれない。しかし、そのような関連を指摘するには、このテキストだけでは不十分であると言わざるを得ない。

ただ、第2部第1章において、「悪を避けるためには、わたしたちはあまねく禁欲を必要とする」と述べられ、さらに、聖書の「悪を避け、善を行え」と「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい」の箇所から、各々、前者のためには「禁欲」が、後者のためには「正義」が必要であることが述べられていることから、人間が行う「徳」に関しては、大きく、「禁欲」と「正義」の二方向から考えていたと推測することは可能であり、これは、四元徳のうちの「節制」「正義」とも何らかの意味で関連しているとも考えられるかもしれない。

ただ、そうは言っても、アウグスティヌスが、388年ごろに『カトリック教会の道徳』を執筆したときに、古代ギリシア哲学以来の、四元徳（ないしは枢要徳）を用いたその捉え方が、418年ごろに『禁欲』を執筆したときにも、そのまま継続していたとはなかなか考えにくい。むしろ、アウグスティヌスが、その後、聖書を読み解く中で、その中から、「倫理」や「徳」についての見解を学ぶ中で、「禁欲」や「正義」について取り上げるようになったとする方が可能性としては高いであろう。

(3) 「禁欲」を支えている考え方

アウグスティヌスの「禁欲」の捉え方は、かれが、マニ教徒やペラギウス主義と対決する中で醸成されていったとする見方はあながち不当とは言えないであろう。とくに、『禁欲』の執筆年代とされている418年ごろには、アウグスティヌスは、ペラギウス主義との対決姿勢をあらわにし、ことに、最大のペラギウス主義者であるユリアヌスとの対決に直面していたと言われている。ユリアヌスは、アウグスティヌスの考え方が、マニ教的であると

言って批判したのであるが、もし、この著作がそのような批判を意識したのであるとすれば、マニ教に対する見解を批判していることも意味のあることであろう。マニ教に対する批判に較べると、ペラギウス主義に対する批判は前面に出ていないようにも読めるけれども、序文で述べられている、「禁欲と呼ばれている魂の徳について、それが神の賜物である」とする見解そのものこそが、ペラギウス主義に対する批判になっていると解することができる。

ペラギウス主義に対する批判は、ことに、使徒パウロの書簡の解釈によって展開していく面もあることを考慮に入れるならば、「禁欲」の問題についても、ことに、恩恵と自由意志との関係も射程に入れながら、検討を深めていく必要があるであろう。

おわりに

1章でも触れたように、『禁欲』の原題は、continentia である。動詞の continere に由来する言葉である。この語は、con+tenere に分解することができ、元来は、「いっしょに保つ」という意味であり、そこから、「いっしょに置く」「離さずに置く」「保持する」「包囲する」「留める」「抑制する」等の意味が生まれてくる。欲求との関係で言うならば、「引き留める」「抑制する」等のニュアンスが強いように思われる。「悪を避け、善を行う」という聖書の言葉の脈絡で使われていることからすると、悪事や肉の業に対する欲求を「引き留める」「抑制する」というような意味で用いられていると考えられ、しかもこれは、神の賜物によって実現することが可能になる人間の魂の徳である、というのがアウグスティヌス的な理解なのではないかと思われる。

このような「徳」の理解は、もちろん、初期の作品に顔を覗かせる四元徳（ないしは枢要徳）とは無縁ではないかもしれないが、それ以上に、聖書的な文脈、ことに、使徒パウロの書簡の理解を通して深まっていくかれの思想と、より一層親近性を有しているともみることができる。

本論では、アウグスティヌスの「徳」についての見解を、その晩年の著作である『禁欲』において検討してきたが、そこには、かつて『カトリック教会の道徳』において、マニ教徒を反駁する意図で、四元徳（ないしは枢要徳）を取り上げながら説明したかれの姿とは随分と違った、かれがその時期に巻き込まれていたペラギウス主義との論争の跡が色濃く表れていることが明らかになったのではないかと思われる。

註

- 1 『カトリック教会の道徳』 25, 46。ラテン語の原題は、*De moribus ecclesiae catholicae et de moribus Manichaeorum* である。日本語訳については、原則的に、『カトリック教会の道徳』（熊谷賢二訳、1963年、創文社）に従う。
- 2 『カトリック教会の道徳』 15, 25。
- 3 『禁欲』の日本語訳については、『アウグスティヌス著作集 27 倫理論集』（教文館、2003年）に収められており、日本語訳については、それを担当した今義博氏も、pp. 357-358 において言及している。本論においては、原則として本訳書を使用することにする。
- 4 最近の研究の動向については、『アウグスティヌス著作集 27 倫理論集』（教文館、2003年）の pp. 360-365 を参照のこと。
- 5 *Oeuvres de Saint Augustin 3, L'ascétisme chrétien* (Declée de Brouwer et Cie, Paris, 1949) pp. 22-101 を参照のこと。

Augustine on virtue in *De continentia*

Kikuchi, Shinji*

アウグスティヌスにおいて「倫理」や「道徳」の問題は、生涯にわたって重要な問題であり続けたが、必ずしも、いつも同じ問題意識のもとに考察されていたわけではなく、むしろ、そのときどきに、かれが直面したことがらと対峙する中で、深められていったと考えられる。

その初期の作品である『カトリック教会の道徳』においては、マニ教徒を反駁する意図をもって、古代哲学に由来する四元徳を用いながら、キリスト教の「倫理」「道徳」を構築しようとしたが、その後期の作品である『禁欲』においては、その当時に直面したペラギウス主義者を反駁する意図を抱きながら、「禁欲」という徳について考察を進めたのであり、それが「禁欲は魂の徳であり、神の賜物である」という理解にも明確に示されている。

キーワード：四元徳, 禁欲, 徳, 倫理

